

受講番号 19102 学校名 県立安芸中学校 氏名 平上 佳世

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 32名
科目名 1年生 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW CROWN(三省堂)

クラスの様子・特徴

2クラスを3コースで習熟度別の授業を行っている。このクラスは発展コースで、全体的に理解も良く、活動を行うととても積極的に取り組むことができる。また、ALTとの授業では、会話や活動を楽しみながら、意欲的に取り組むことができている。

問題の確定

英語学習のスタートにあたり、これからの学習の中で、より多くの表現を学び、簡単な会話を楽しめるような工夫をしたい。

予備調査

A 授業の観察

5月下旬から1ヶ月間の観察を行った。まだ英語で話すことが恥ずかしいという生徒は少ない。口頭練習が不足した時は、戸惑うこともあったが、意欲的に活動に参加し、Thank you.やReally?などの表現を使う生徒も出てきた。

B 生徒による授業評価

英語が話せるようになりたいと思っている生徒がクラスの大半を占めている。そのため、授業の目標をその時間内に理解し、使ってみようという意欲が見られる。友達との協力もよく、インタビューゲームが楽しいという生徒が多くなった。

C 学力データ

5月になると、Thank you.やHere you are.といった簡単な言葉が自然と出るようになった。また、教室英語も自分たちでも使うようになってきた。7月には、5語程度を使ったまとまりのある文章(5～7文)が書けるようになってきた。

リサーチ・クエスチョン

身近な人やものについて、また自分自身のことを、簡単な英語を用いて話すことができるようにするためにはどうしたらよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

毎時間、ペアを使って簡単な会話をする、英語で話すことに対する抵抗感を取り除くことができるだろう。

実践1

① 固定のペアを作り、毎時間あいさつと簡単な会話をさせた。日付や天候など、機械的に答えられるものと、ペアで聞いてみたいこと(前時の復習も含めて)を質問させた。
② ALTとの授業開始時に、ウォーミングアップゲームを行う。このとき、いつも同じ質問にならないよう、ALTの協力で、ウォーミングアップ問題(既習の文法事項にとらわれずに)を作成した。

検証1

① ペアの固定化で協力体制が築かれた。単調な質問だったのが、より実生活に近づいた質問に変わってきた。しかし、いつも同じ返事になるなどマンネリ化も見られたので、さらに質問事項の提示が必要である。
② ウォーミングアップゲームでは、いつ自分が指名されるかわからないドキドキ感と指名されて答えたいという積極性が同時に感じられた。答えも文章を心がける生徒が現れた。ウォーミングアップ問題はさらに発展させたい。

仮説2

教科書などの対話文をペアで練習することで、アイコンタクトや会話中の間合いなどを身に付けることができるだろう。

実践2

① ウォーミングアップに、ペアでの教科書本文チェックや既習表現の(日⇒英、英⇒日)チェック活動をし、ペアでの評価、教師からの評価を行う。
② ALTとのモデル会話で、アイコンタクトやあいづちをより自然な状態で見せる。
③ モデル会話の内容を、日常生活に近づけ、興味の湧くようなものにする。

検証2

① 英語を使うことに慣れさせる取り組みを行った結果、生徒からは、楽しく活動できた・間違えるのも恥ずかしくなくなったという意見が出された。
② 活動の中で、アイコンタクトやあいづち表現が、自然と出てくる生徒が増えてきた。友だちが使っているのを見て、どんな場面で使えばいいか分かったという意見も出てきた。
③ リスニング活動が楽しくなったという生徒が増加傾向にある。

仮説3

Q&AをYES/NOで終わらず、もう一つ発展させて踏み込んだ質問をさせることで、会話を続けることができるようになるのではないかと。

実践3

① インタビュー活動の中で、日常表現を用いる場面を工夫する。Q&Aの場合は、必ずルール(日本語はピンチのときだけ)の徹底をする。
② ALTから、Open questionsを尋ねられる機会を多く取るようにする。答えられた生徒には、Prize(シールなど)を与えて、動機付けとした。

検証3

① 相づち表現を使うことに、初めは抵抗感を持った生徒も多かったが、徐々に使えるようになってきている。
② 最初は不安でいっぱいだったが、ALTに話し掛けられ、答えられたときがうれしかったという感想が多くなってきた。しかし、正確さではまだまだ達成できていない面も残された。

研究の成果

生徒の「話したい」という気持ちをどこまで大切にあげられるかが、自分自身の大きな課題であった。このリサーチを通じて、継続していくこと・検証の大切さを改めて感じた。繰り返して活動していくことで、生徒の自信にも繋がり、また自分自身の授業展開の反省・改善にもなった。生徒へのフィードバックで、「話す力」は伸びていき、授業の活性化もされた。

約半年間ではあったが、たくさんの収穫と生徒自身の可能性を見出せたので、今後も継続して取り組んでいきたい。

今後の授業改善の課題

ほとんどの生徒が「話すこと」を難しいととらえず、楽しいととらえてくれたので、今後どのように、その気持ちを継続させていくかが課題である。そして「正確さ」という点では課題も残っているので、どのように身に付けさせていくかも、授業展開や教材作りに工夫が必要だ。また、学年に応じた「話す力」をつけられるような活動を今後取り入れていきたいと思う。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0887-34-1145